

『幼稚園の現場から』

・これは、いじめ？

鶴谷主一

原町幼稚園(静岡県沼津市) 園長

保育園の年中児が・・・

私の妻は隣接する原町保育園の副園長をしています。彼女から聞いた話です。

6月のある日

保育園の幼児組(年少～年長)は吹き抜けのホールに集まってみんなで昼食の準備をしていました。

6人掛けのテーブルで、席は自由に選べる状況だったので、仲の良い年中の男児が5人で座っていたそうです。そこに、軽い障がいのある男児Aと一緒に座りたくてやってきた。

Aがいると会話がうまく成り立たないとか、一緒にあそんでいても決めごとを守らないなど、子ども同士でもなんとなく嫌なことがあったのだろう。

「Aと座りたくないよね～」や「だもんねー」そんな会話を交わしていた5人のうちのBが、Aが座ろうとした席に身を乗り出し、席に座らせないように邪魔をした。4人は「いいぞ！」といった感じ。

Aと一緒に座りたいという気持ちが強く、空気を読んで引き下がるようなことも無く、強引にイスに座った。すると5人はサッと隣のテーブルに移ってしまった。一人残されたAもちょっと遅れて隣に移った。すると5人はまた元のテーブルに戻ってくる。そしてまたイスをめぐるのいざこざが始まり・・・

とうとう頭に来たAは、Bの服をつかんで引っ張った。そこでBが「せんせーい！Aくんがやったー！」と訴え

る。

少し離れたところで後ろを向いて昼食の支度をしていた若い担任(2年目)は、はじめてその場にやってきて、Aに向かって「ダメでしょ、お友達を引っ張っては・・・」と注意を始めた。

Aはもともと話すことが苦手なうえに、怒りと興奮とで、じゅうぶんに状況を説明出来ないで黙り込んでしまった。

そこで、2階から一部始終を見ていた副園長がすっ飛んで行って、担任に状況を説明し、Bと4人をこっぴどく叱ったという。ちなみにBはすぐに泣きべそをかいて謝った。

Aは精神的に幼いため、感情的なしこりを感じることはなく、目的が達成されればゴキゲンで着席した。

この事例から・・・

このような場面は、保育現場では時おり起こってしまうことです。そこで「こんなこともあるから気をつけよう」という“気づき”を職員間で共有することができました。

まとめると『保育中は、子どもの様子をしっかり見ていることはもちろんだけど、見ていなかった場合の子どものトラブルは双方の意見や周りの状況をよく聞く。そして、子どもの人間関係や性格を考慮した保育者の洞察力が大切』ということになります。

職員のスキルアップにはつながる事例でしたが、このケースは別の意味で考えさせられました。

最初この話を聞いた時に、私は非常に驚きました。年長児の話だと思っていたからです。そこで、「え？ 年中なの！」と聞き返していました。年中児の6月に、しかも男児にこのような、いじわるな連係プレーができるなんて幼稚園では想像が付きませんでした。幼稚園の年中男児はもう少し幼い感じですので、AとBの直接対決、ようするにケンカになっていたと想像します。

いじめの芽？

いじめの問題がメディアで取り上げられている昨今、気にしすぎかなあ、と思いつつ気になってしまいました。

これは“いじめの芽”でしょうか？

Bを含む5人の行動を小中学生に置き換えると、完全にいじめに見えますが、、、迷った末にこう考えることにしました。『いじめという言葉で定義する必要もないが、見過ごしてはいけない成長の過程』

「仲間に入れてくれない！」

「あそんでくれない！」

「いじめられた」・・・

という訴えは、年少児の時期からあります。ほとんどが2、3人。多くても4人グループの中でのトラブルで、仲良くしていたのに相手が急に遊んでくれなくなったり、他の子と仲良くなったので縁を切られたり、遊びの輪に入れてくれなかった、という内容です。

ボス的な子どもが、仲間に加わるのを許可したり拒否したりという仕切りを行うことも珍しくありません。気の弱い子どもや、まだ幼くて言われるままにくっついていくような子どもを従えてグループを形成するのです。独占欲もからんできます。

幼児の人間関係も大人の縮図、というよりもっと赤

裸々に繰り広げられていきます。しかし、その関係は子どもたちの成長発達とともに、逆転したり、関係が変わっていったりしますが、それが子どもたちにとっての人づきあいの学習となると考えています。

幼児期になにをすべきか

そこで！です。

私たち幼児教育の役割として

いじめに加担しない子ども、

いじめを受けてもめげないタフな子ども、

もっと理想的にはいじめを防止、あるいは回避できる子ども。そんな一面を持つ人を育てるには、幼児教育の現場でどういう教育をしたら良いのか、いろいろと考えてしまいました。

残念ながら幼児教育の結果はすぐに見ることができません。何年後かに自覚した人が「これは幼児期のあの経験のおかげだ！」なんて思うことが稀にあったとして、はっきりと紐づけできるものではないからです。しかし、その人の潜在意識やものの考え方の基礎を形成する時期に多少影響を与えていることは事実なんだと思います。

それを踏まえて、いま現在、こんなことがひっかかっています。あくまでも個人的な思いですので、ご意見を頂ければ幸いです。

仲良くしなさい！という呪縛

私の幼稚園の保育目標にも「なかよく」という言葉が使われています。いろんな事象に興味を持ち、広い心、大きな器になってほしいと、幅広い意味を込めているつもりですが、「なかよく」という言葉がその第一の意味を発信し続けているのは事実です。そして、ケンカしないで仲良くしなさい。と子どもたちは物心ついた頃から言われ続けているでしょう。

だからかわかりませんが、この頃子どもたちのケンカが少なくなっているような気がします。取っ組み合いのケンカはめったに見ません。園内は平和なので良いのですが、本当に良いことなのでしょうか。ケン

力をしたり、仲直りをしたりする経験は、立ち直りが早く、相互の関係修復も容易な幼児期だからこそ積極的に経験すべきことかもしれません。

ちょっとアタマの回る子どもなら、ケンカで叱られるより他の方法で、、、ということにもつながるのではないかな、などと考えてしまいます。

だからといって、「ケンカしろ!」とは言えませんから、起こったらすぐに止めずに見守る姿勢を推奨しています。

友だち、仲間が一番なんだよ!

という呪縛

いちねんせいーになったら

ともだちひやくにんできるかな

という歌もあるほど、教育現場でも世間でも「友達」「仲間」に手放して価値を強調しています。幼稚園で歌っている歌にも仲間を讃えたものが多く、よく歌います。子どもたちに伝えたいことだし大切なものですが、もしかして仲間はずれになることに恐怖を感じるほどの呪縛をかけ過ぎているとしたら、、、うーん、考えすぎでしょうか。ステキな歌がいっぱいあるんだけどねえ…。

みんなと同じ

幼稚園では制服、カラー帽子、靴や体操服…

いろんな持ち物が同じです。そして一斉活動では同じ時間に集まって、同じ活動をして、キレイに並んで…という集団生活をしていきます。お弁当箱を並べてみると、みごとに男児はブルー系、女児はピンク系で揃います。その中で所属意識が育ち、規範意識も育ち、学校へ入学するという準備も出来るのですが、、、。

みんなと同じでなくてもいいんだよ、自分が大事だよ。という視点も育てないと片手落ちではないかと思うのです。

エネルギーの放出

雨の日が続いたりすると、外で遊べない子どもたちのフラストレーションが溜まって集中力が低下したり、トラブルが多くなったり、すぐに泣いたりすることが多くなります。こうなると保育がうまくいかない。

なので、保育者たちはよく知っていて、ホールに連れて行ってワーツとダンスをしたり、騒いだりして発散遊びを行います。雨が降っていない日でも、朝にじゅうぶん遊んでから部屋に入らないと、落ち着かない子どもがいたりします。エネルギーが発散されていない状態です。中には攻撃的なエネルギーを溜め込んでいる子どももいるので、それを放出してやります。

ずっと抑圧されたままの状態を意図的に開放してやる。それがないと、その余ったエネルギーが気に入らないクラスメイトに向かう場合もあるのかもしれないね。

おわりに

いじめの問題は幼児教育の現場では、命に関わるような重大な問題としては顕在化してきません。だから何もなくていいというわけではなく、潜在化していることがあるとしたら、それは改善していかなければならないはずですが、いまはハッキリしたこともわからず手探り状態ですが、今後もそうかもしれません。ハッキリ「これがいいんだ!」と猪突猛進するのも危ういかもしれません。かもかもだらけで、結論の出ない今回になってしまいました。

最初の話に戻りますが、あの5人のとった、いじめっぽい行動はあれ以来無く、時おりケンカをしながらも、文字通り“仲良く”やっているそうです。



ツルヤシュイチ

(幼稚園勤務29年/うち園長10年目)

<http://www.haramachi-ki.jp>